

之ニ依リテ見ルニ、十五歳以下ノ者及自十五歳至三十五歳ノ年齢ニ於ケル死亡數ハ一九〇〇年以來殆ト同様ノ率ヲ示シツツアリシニ、本流行ノ至ルヤ、同率ニ著シキ變化ヲ來シ、十五歳以下ノ率ハ七一一%ヨリ二五%ニ、一五—三五歳ノ年齢ニ對スル率ハ八一〇%ヨリ四五%ニ増加セリ、自三十五歳至五十五歳年齢ノモノハ犯サルモノ比較的小カリシモ、最近過去ニ於ケルモノニ比スレハ多少ノ増加ヲ示セリ、自五十五歳至七十五歳及七十五歳以上ノ年齢ノモノハ過去ニ於テハ六〇—七〇%ヲ示シツツアリシニ、本流行ニ入ルヤ該率ハ五五—七五歳ノ年齢ノモノ一〇%、七十五歳以上ノモノノ率二%ニ下降セリ、此變化ノ詳細ハ次表ニヨリ一層明瞭ナル可シ、該表ハ一九一四—一七年ニ於ケル自十月至十二月期間ノ年齢別人口千對流感死亡率女性ニ關スルモノヲ一九一八年同期ニ於ケル同率ト比較セルモノナリ

年 度	0—4	5—9	10—14	15—19	20—24	25—29	30—34	35—39	40—44	45—49	50—54	55—59	60—64	65—69	70—74	75—79	80—84	85—89	90—94	95—99
一九一八	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
一九一七	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0

本表ニ明ナルカ如ク二十五歳乃至三十歳ニ於ケル一九一八年ノ死亡率ハ一九一四—一七年(大正三年—六年)ニ於ケルソレニ比シ約五百四十倍ノ多數ヲ示セリ
此ノ如キ年齢別死亡率ノ變化ハ本流行ノ發生ト共ニ現レ來リシモノナルコトハ左記ノ表ニヨリ之ヲ認ムルコトヲ得可シ

イングランド、ウエールスニ於ケル年齢別流感死亡數(女性ニ關スルモノ)

年齡別	一九一九年															
	一—三月	四—六月	七—九月	一〇—十二月	一—三月	四—六月	七—九月	一〇—十二月	一—三月	四—六月	七—九月	一〇—十二月				
合	八	八	七	七	六	六	五	五	四	四	三	三	二	二	一	一
計	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
登	七	七	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
死	六	七	五	一	六	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
數	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
同	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
上	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
千	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
分	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
率	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

更ニ週別ニヨリ年齡別流成死亡數ヲ見ルニ、六月末約一週間ニ於テ同様ノ變化ヲ明ニ認ムルヲ得可シ

時間	一九一九年															
	一—三月	四—六月	七—九月	一〇—十二月	一—三月	四—六月	七—九月	一〇—十二月	一—三月	四—六月	七—九月	一〇—十二月				
六、	六	六	六	六	五	五	五	五	四	四	四	四	四	三	三	三
三、	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
八、	二	五	八	一	五	八	一	四	七	〇	三	六	九	一	一	一
四、	七	〇	三	六	九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	七	〇	六	七	九	五	五	五	三	三	三	三	三	三	三	三
流	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
感	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
死	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
亡	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
數	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
(年齡別)	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

前表ニ關シ初メ十二週ヲ合計シタルモノト、最後ノモノトヲ千分率トシテ比較スレハ左ノ如シ

時期	總計	流	感	死	亡	數	(年齡別)
最初十二週	一、〇〇〇	〇	一	一	一	一	一
最後八日間	一、〇〇〇	一	一	一	一	一	一

記述セシモノハ總テ女性ニ關シタルモノナルカ、之カ調査ヲ行ヒタル英國統計局ハ男性ニ關スル當該變化モ亦之ト同様ナル可シトナセシト雖モ、戰役ノ爲メ十五歳乃至四十五歳ニ於ケル年齢級ノ男性人口ノ數不明ナルカ故ニ、之ニ關スル詳細ハ調査スルコト困難ナリトセリ

此ノ如キ年齢別流感死亡數ノ變化ヲ社會狀態ノ變化ニヨリ説明セントシ、一九一八年ニハ軍需品製作工場ニ若キ婦人ノ群集セシカ爲メニ非ルヤト想像シタルモノアリシカ、英國當事者ハ之ニヨリ説明スルコトハ困難ナリトセリ、其ノ理由ニ曰ク

(一) 一九一八年ノ流行ノ如キ大流行ハ事實上、國民ノ全部ハ傳染ノ機ニ接シタルモノト思ハサル可カラズ

(二) 此ノ如キ年齢別ノ變化ハ戰役參加國ノミナラス、之ニ參加セサル諸國ニ於テモ報告セラレタリ

(三) 當該變化ハ一九一八年六月ニ於テ急激ニ現レタリ

スコットランドニ於テ調査シタル同様ノ調査ノ成績ヲ左ニ掲ク、前記ノイングランドウエールスニ於ケル調査成績ノ多少ノ差異アルヲ見ル

自一九一八年七月期間ニ於ケル流感死亡者ニ就キ、性及年齢ノ關係ヲ見ルニ

性及年齢別	流 感 死 亡		推定人口一〇〇、〇〇〇ニ對スル率
	數	七	
男	八、四〇三	四二六	四二六
女	九、一七二	四三七	四三七
合 計	一七、五七五	四三二	四三二
	七二〇	七七七	七七七

一	一、七九四	四九四
一	七八六	一七九
一	六一五	一四六
二	二、六五八	三五二
二	四、一四〇	六五三
三	二、〇〇三	三九〇
四	一、六五六	四三三
五	一、三二一	五二二
六	一、一七九	七四五
七	七〇三	一、一三五

二、衛生狀態ト流感死亡トノ關係

倫敦ニツキ調査セシ處ニ依レハ流行期四十六週ニ於テ人口千對流感死亡率ハ衛生區域ニ於ケルモノ四・三ナルニ對シ、非衛生區域ニ對スルソレハ五・一ヲ示セリ、衛生區域ノ第一位ニアラサル Kensington ハ最低人口對死亡率三・四ヲ示シ、非衛生區域ノ第一位ニアラサル St. Pancras ハ六・二ト云フカ如キ最高人口對死亡率ヲ見タリ、此外之ニ類スル例少カラサルヲ見ル

今次ノ流行ニ於テハ衛生區域ト非衛生區域トノ別ナク殆ト同様ノ程度ニ本病ノ侵襲ヲ被リタルカ如シ

又富有ノ程度ニ付キ之ヲ見ルニ、最モ富有ナル地域 Kensington 及 Hampstead ハ人口對流感死亡率最モ低カリシモ、第三位ノ富有地域ナル Chelsea ハ中等度ノ富有程度ニ在ル St. Pancras ヲ除ケハ最高ノ同死亡率ヲ示セリ、此ノ如キ事實他ニ少カラス、少クトモ倫敦ニ於テハ富有ノ程度ハ人口對流感死亡率ニ大ナル影響ヲ與ヘサリシカ如シ、因ニ富有ノ程度ハ家ニ使用スル下婢ノ數ニヨ

リヲ側定シタルモノナリ

其ノ他業務所、室敷等ノ關係ヲ見ルニ、現在調査セラレタル範圍ニ於テハ事務所又ハ工場等ニ於テ從業シツツアル者ハ家庭ニ於テ就業シツツアル者ニ比シ殊ニ劇シク犯サレタリト認ム可キ事實ヲ見サルノミナラス一室一人以上ノ家庭ト之ヨリ少數ナル人員ノ家庭トノ間ニ特別ナル罹患ノ差異ヲ見サリキ

更ニ職業ノ關係ヲ左ニ記述セントス

Dr. Gregor カ Falmouth ニ於テ施行シタル調査ニ依レハ亞鉛其ノ他ノ工業ニ於テ發生スル瓦斯ハ本病ニ對スル保護的ノ作用ヲ或ル程度ニ有スト云フ、同氏カ Dr. Benjamin Moore ト共同シテ爲シタル業績ニヨレハ Nitrogen Peroxide (NO₂) 又ハ Sulphur dioxide (SO₂) ノ消毒作用ハ同瓦斯ニ接觸シタル後一乃至二時間ニ始リ、二乃至四時間ニシテ著シク表レ來リ、更ニ六乃至八時間ニ於テ最高ニ達シ、十二時間ニシテ遂ニ消失スルニ至ルモノニシテ、人ニ不愉快ヲ感セシメサル濃度ニ、同瓦斯ヲ含有スル空氣モ著シキ殺菌的作用ヲ有シ、鼻咽腔ニ就テモ其ノ效果ヲ有スト

Falmouth ノ成績ハ London, Swansea 及 Widnes ニ於ケル同様調査ノ成績ヲ確定スルニ付キ興味アルモノナリキ、左ニ Swansea ニ於ケル調査ノ成績ヲ掲ク可シ

Swansea ニ於ケル調査ハ River Tawe ノ兩堤防ニ存在スル銅及亞鉛工場ニ於ケル從業者ニ就キテ行ヒタルモノニシテ、 Pentrechwyn 村ノ住民中十五歳乃至六十五歳ノ年齢級ノ流感患者ヲ以テ之カ對照トセリ、但シ同村ニハ若干ノ亞鉛從業者ハ生活ヲ營メリ、調査ノ爲メ從業者ヲ左ノ二ニ區別ス

第一 瓦斯ノ存在スル建築物内ニ於テ常ニ、或ハ一定期間從業シツツアル者

第二 瓦斯ノ中ニ從業シツツアラサル者

而シテ調査ハ秋期及冬期流行ニノミ關スルモノニシテ、空中ニ混在セル瓦斯ノ主ナルモノハ Sulphur dioxide ナリキ

一、各種從業者ノ數及其ノ罹患率左ノ如シ

- 第一類 常ニ瓦斯ノ中ニテ從業スルモノ 六三四人
- 第二類 或ル時間タケ瓦斯ノ中ニテ從業スルモノ 三二三
- 第三類 瓦斯ノ中ニハ從業セサルモノ 八八三
- 合計 一、八四〇

流行期	第一類		第二類		第二及第三類		第三類	
	數	%	數	%	數	%	數	%
秋	一一四	二〇・〇	四三	一三・九	一六九	一七・九	八九	一〇・二
一—三月	七五	二二・〇	三九	一一・六	一一四	一二・二	六五	七・四
合計	一九九	三三・〇	八二	二六・五	二八一	三〇・一	一五三	一七・六

二、Pentrechwyn 村ニ於ケル狀態

- 戶數 二〇七
- 人口 (亞鉛及銅工場ニ於ケル從業者ヲ除外ス) 八二七
- 同 (十五歳乃至六十五歳ノモノ) 四六六

罹病率ノ狀況左ノ如シ

流行期	全年		一五—六五年	
	數	%	數	%
秋	八四	二〇・三	六四	一三・七
一—三月	七〇	九・〇	五三	一一・三
合計	一五四	一九・三	一一七	二四・〇

是ト殆ト同様ノ成績ハ、Vindos 及 London ニ於ケル調査ニ於テモ得ラレタリ
 三、流行性感胃ト其ノ合併症

イングランド・ウェールズニ於ケル流感ト合併症(死亡千分率)ハ左ノ如クニシテ合併症中最モ多敷ナルハ肺炎ニシテ、氣管枝肺炎之ニ次キタリ

合併症	一九一八年		一九一九年	
	男	女	男	女
結核	二	三	二	一
腸炎	三三	二九	一六	一八
心臓病	六七	八二	三二	二〇
氣管枝肺炎	一〇五	一〇二	九八	三二
氣管枝肺炎	一三六	一三一	二二八	二〇四
大葉性肺炎	一一七	一〇三	六三	五六
其ノ他ノ氣管枝肺炎	三三三	三二一	四〇一	三七〇
其ノ他ノ原因	五二	四六	三三	三二
合計	一一八一	一一一五	七八一	七七八
合併症ナキモノ	九六二	九六三	九七〇	九七七
合計	一一二九	一一四四	一〇六九	一〇六五

同様ノ關係ヲスコツトランドニ於テ見ルニ、死亡診斷書ニ流感ノミヲ記載セルハ極メテ少數即チ二千八百七十六名ヲ算スルノミナルニ、他ノ疾病ト合併シテ記載セラレタルハ頗ル多數ニ上リ一萬四千六百九十九名ニ達シタリ、而シテ合併症中最モ頻同ナリシハ肺炎ニシテ、流感死亡數一萬七千五百七十五中、一萬二千三百三十六ニ於テ肺炎ヲ合併セリ

四、免疫

一、マンチエスタ―ニ於テハ區域ヲ選ミ特ニ免疫ニ付キ調査スル所アリ、其ノ成績左ノ如シ

イ、戸數一、〇八一人口四、六六六	夏期ニ於テ罹患セシモノ	秋期流行ノ際罹患セシモノノ數	同上%
夏期ニ於テ罹患セシモノ	六九四	二四六	(八・五)
夏期ニ於テ罹患セシモノ	男 二四六	男 一八二	(一・六)
夏期ニ於テ罹患セシモノ	女 四四八	女 二二五	(七・八)
秋期流行ノ際罹患セシモノノ數	二二	二五三	(一一・七)
同上%	同上%	同上%	同上%

ロ、夏期及秋期ニ於テ記サレタル戸數	夏期ニ於テ罹患セシモノ	秋期流行ノ際罹患セシモノノ數	同上%
夏期ニ於テ罹患セシモノ	一九九	七九	(二五・四)
夏期ニ於テ罹患セシモノ	男 一九九	男 一七三	(四四・〇)
夏期ニ於テ罹患セシモノ	女 一〇〇	女 一七三	(二五・三)
秋期流行ノ際罹患セシモノノ數	三五四	一八一	(三九・〇)
同上%	同上%	同上%	同上%

即チ秋期流行ニ於テハ前回ノ流行ニ於テ罹病セシモノモ、罹病セサリシモノモ殆ト同様ノ率ニ犯サレタリ、甲ノ罹病率ハ一〇・二%ヲ示セシニ、乙ノ同率ハ一〇・五%ヲ示シタリ

一、Guisboroughノ衛生官ナル Dr. Stainclorpe ハ一區域ノ戸別調査ヲ施行シ左ノ成績ヲ得タリ

夏期流行ニ罹患セシモノ 一〇〇
 秋期流行ノ際罹患セシモノノ數 二九
 同上% (二六・三)

夏期流行ニ罹患セサリシモノ 四一三
 秋期流行ノ際罹患セシモノノ數 一三
 同上% (二七・一)

總人口 五二三

一、Dr. Macewen ハ公立學校等ニ就キ本件ニツキ調査施行セシカ Hatleybury College ニ於ケル成

續ハ前記マンチエスターニ於ケル調査ト殆ト同様ノ成績ヲ示セリ、同氏ノ行ヒタル調査ノ成績左ノ如シ

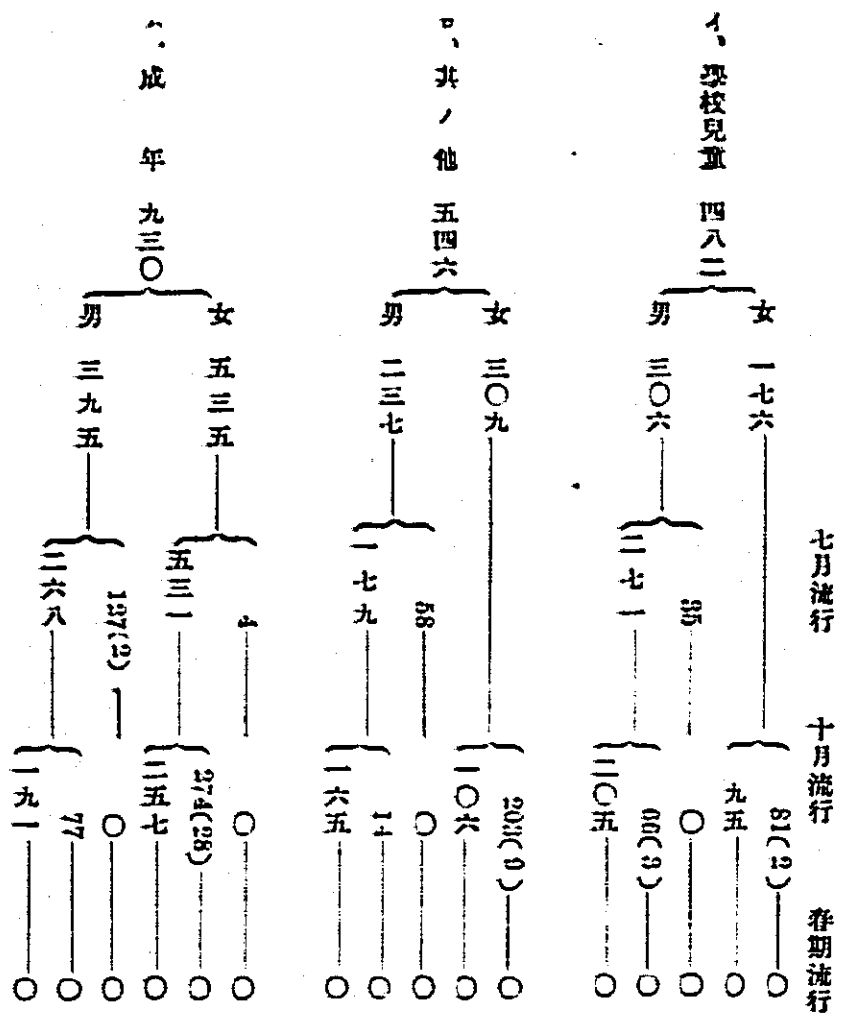
調査セシ場所	調査セシ人員	夏期流行		秋期流行ニ於テ罹患セシモノノ數		夏期及秋期ニ於テ罹患セシモノノ數		春期流行ニ於テ罹患セシモノノ數	
		罹患セシモノノ數	%	罹患セシモノノ數	%	罹患セシモノノ數	%	罹患セシモノノ數	%
Clifton College	四五一	一六二	39.0	二八九	70.0	一九〇	46.0	五九・一	14.0
Hailey-fury College	五一五	一八〇	35.0	三三五	65.0	二六二	50.0	二四・四	5.0
Evon College	七五三	三九三	52.0	三六〇	47.0	* 一八八	25.0		
Harrow	四二九	九〇	21.0	三三九	79.0	八一	19.0		
Finchley Council Schools	一、二二四	一三四	11.0	一〇九〇	89.0	七〇三	57.0		
London Police	七四六	五〇	6.7	六九六	93.3	五八三	78.1		

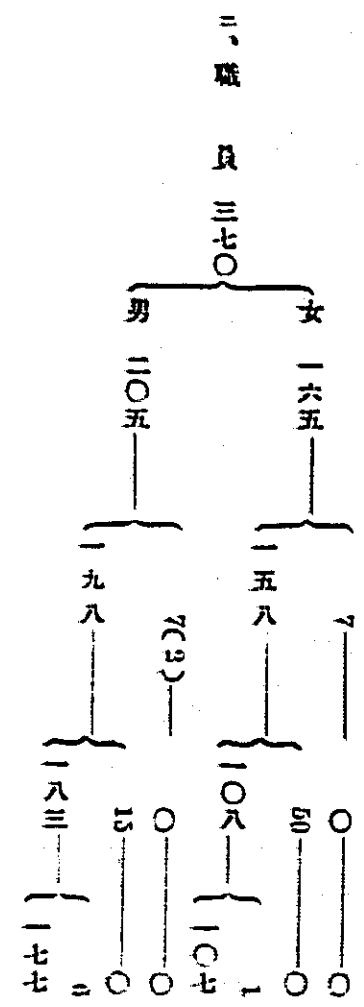
・ 學校兒童ノ大多數ハ秋期流行ノ前ニ當リ流感豫防接種ヲ施行セリ

Dr. Arnold ハ Leicester ニ於テ同様ノ調査ヲ行ヒ、夏期流行ノ際罹患セシモノハ著シク強度ナル免疫ヲ生シタルコトヲ發見セリ、然レトモコハ秋期流行ニノミ關係セルモノニシテ夏期及秋

期ニ於ケル罹患ハ冬期流行ニ對シ何等ノ保護ヲモ示ササリシカ如ク見エタリ、本狀態ハ Dr. Macewann ノ調査セシ Clifton College, Eton College 及 Harrow ニ於テ得タル成績ニ比較スルコトヲ得可シ

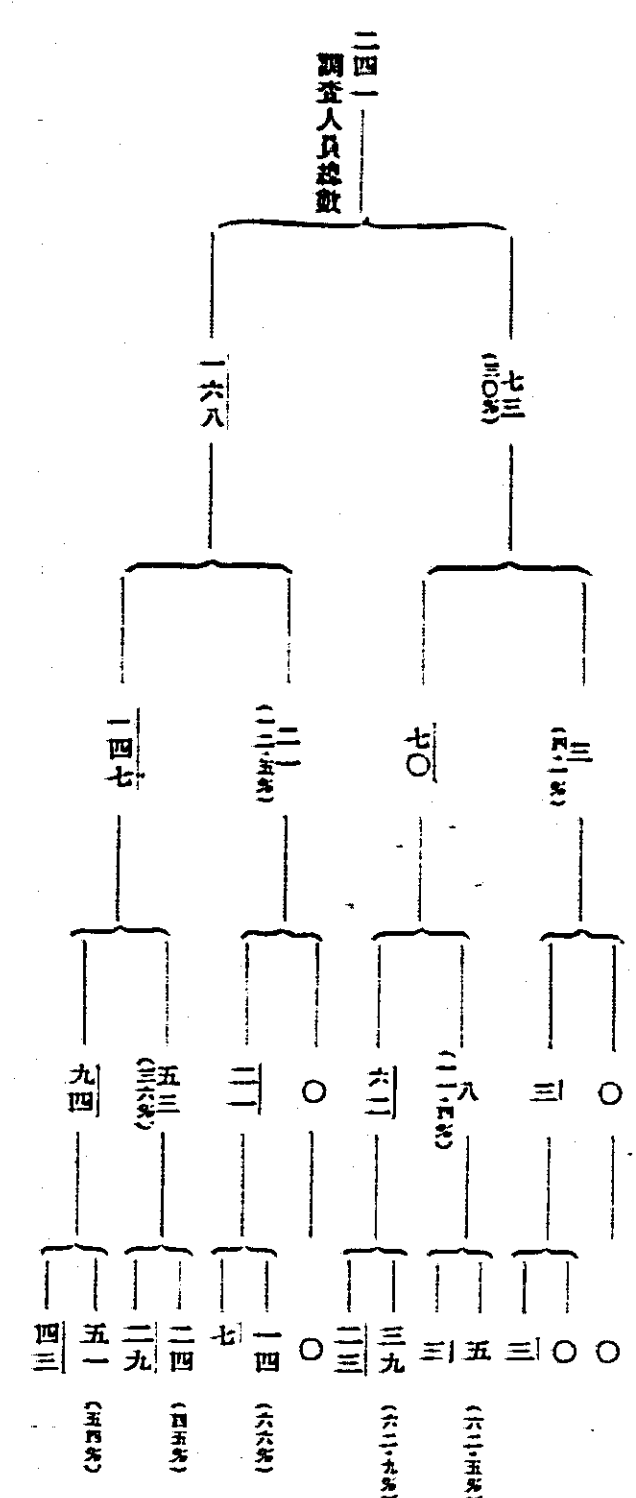
Dr. Darenth Industrial Colony ニ於テ調査セシ成績左ノ如シ
 (イタリヤ)文字ヲ以テ記セルハ患者ヲ示シ、括弧内ノ數字ハ死亡ヲ示ス)





一、イギリスランドウエールズニ於ケル一公立學校ニツキ調査セシ處左ノ如シ
 圖中一印ヲ附シタル數字ハ罹患セサリシモノノ數只數字ノミヲ記載セシハ罹患セシモノノ
 數ヲ示ス

一九一八年 夏期流行
 一九一八年 秋期流行
 一九一九年 春期流行
 一九二〇年 春期流行



本表ニ明ナル如ク罹患セシモノ總數百九十一名中一回罹患ノモノ一〇三、二回罹患ノモノ八
 三、三回罹患ノモノ五ヲ算セリ、尙ホ一九一八年夏期及一九一九年春期ニ於テ罹患セシノモ六二
 五%ハ一九二〇年ノ流行ニ於テ本病ノ犯ス處トナリタリ
 一、Camp Funston ニ於ケル亞米利加軍隊ニ就キ〇_二及_三其ノ同僚ノ調査セシ處ニ依レハ明ニ免疫
 ノ存在ヲ證明スルコトヲ得タリト云フ、其ノ詳細左ノ如シ
 一九一八年 自三月二十九日 至四月四日 期間ニ於テ同キキャンプ總人員二萬九千人ノ中一萬二千二十七人ハ
 本病ニ罹患シ病院ニ收容セラレタルカ、本流行ハ約二週間ノ後終熄ヲ見タリ、其ノ後一ヶ月弱
 ノ間隔ヲ以テ第二、第三、第四及第五ノ流行發生セシカ、是等ノ流行ハ何レモ新軍隊ノ到着ニ一
 致セリ、第二回流行ハ四月三日ニ始リ四月八日ニ最高潮ニ達シタルカ本流行ハ須臾ニシテ終
 熄セリ、而シテ本流行ニ於テ罹患セシモノハ何レモ患者發生ノ前四、五日ニ於テ、キャンプニ致
 若セルモノナリキ、其ノ後四月二十八日、五月三十日、及六月二十五日ニ於テ發生セシ流行ニ於
 テモ前者ト同様ノ状態ヲ見タリ

此ノ事實ニ見ルニ三月ニ於ケル第一回流行ハ罹患者ニ強キ免疫ヲ附與セシコト明ナリ
 此ノ如ク免疫ニ關スル調査ノ成績ハ或ハ免疫ヲ發生スルカ如ク或ハ然ラサルカ如ク、ソノ
 一致セサルモノ少カラス、英國當事者ハ本事實ヲ説明シテ、本病ニ關スル免疫ハ罹患ニ因リ發
 生スルモノナリト雖モ、此ノ如キ調査成績ノ現ハルハ、流感病原體ニハ毒力及免疫元ヲ異ニセ
 ル數種ノ菌株ノ存在スルカ爲メナル可シトノ臆說ニヨル外ナシトセリ、例ヘハ前記 Leicester
 ニ於ケル場合ノ如キ秋期流行ハ一部ハ夏期流行ノ再發一部ハ他ノ菌株ノ侵襲ニ依リ惹起セ
 ラレタルモノナル可ク、又夏期及秋期ニ於ケル罹患カ冬期流行ニ何等ノ保護ヲ與ヘサリシハ
 恐ラクハ前二回ノ流行ニ於ケル菌株ト異レル菌株ニヨリ第三流行ヲ來セシモノナル可シト

五、マンチエスター及ライセスターニ於ケル調査

一、マンチエスターニ於ケル調査

Dr. Niven ハ一九一八年十二月マンチエスターニ於テ衛生中央官廳ノ指示ニ從テ、流感ニ關スル種々ナル調査ヲ施行セリ、各衛生視察官ハ其ノ受持區域ニ於テ適當ナル區域ヲ選ミ、更ニ各區域ニ就キ六萬ノ家ヲ選ミテ必要ナル事項ヲ調査シタルモノナリ、其ノ成績ニヨレハ調査家屋總計一〇一八、其ノ人口四、六六六ノ中、殆ト半數ノ家屋(五〇〇)ハ夏若クハ秋ノ流行ニ於テ本病ニ犯サル所トナリ、總人口ノ二五%即チ一、一〇〇ハ本病ニ罹患セリ、而シテ人口ノ一四・八%ハ夏期流行ニ於テ、其ノ一〇・三%ハ秋期流行ニ於テ罹患セリ

本調査成績ノ主ナルモノ左ノ如シ

一、罹患數

夏期	流行	秋期	流行
罹患セシモノ	罹患セキリシモノ	罹患セシモノ	罹患セサリシモノ
男 二四六	男 一八二〇	男 一七五	男 一八九〇
女 四四八	女 二、二五二	女 三〇五	女 二、二九四

二、再度感染者

年齢別	男	女	性
0	0	0	0
1	1	1	1
2	2	2	2

三、患者年齢別百分率

年齢別	男	女	性
0	0	0	0
1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
合計	52	52	52

年齢別	夏期流行		秋期流行	
	男性%	女性%	男性%	女性%
0	3.0	5.7	9.0	7.7
1	7.4	4.3	5.5	13.0
2	5.0	9.8	12.3	15.2
3	1.6	15.8	11.0	11.6
4	1.8	20.6	3.0	11.0
5	1.5	21.4	9.2	12.9
6	1.5	15.4	3.9	7.9
7	8.6	11.2	4.0	10.0
8	1.9	17.2	8.4	11.7
合計	30	57	90	77

夏期流行ニ於テ最モ多數ニ犯サレタルハ、前記ノ如ク十五歳至乃四十五歳ノ間ノモノナルニ、秋期ノ流行ハ之ニ比スレハ年少ナルモノニ多數ノ發生ヲ見タリ、此ノ事實ハ一見、免疫ノ關係ナルカ如ク思ハシムルモ、精細ナル調査ヲナセハ、其ノ然ラサルヲ知ルヲ得可シ、何トナレハ中年ノ

モノニ付テ見ルニ夏期流行ノ際ニ罹患セルモノモ、罹患セサルモノモ殆ト同様ニ、秋期流行ニ於テ犯サレタルコトヲ認ムルヲ以テナリ

一、Leicesterニ於テ Dr. Arnold ノ施行シタル調査

Leicester County Korouhニ於テハ一九一八年夏、秋及一九一九年春ニ於テ本病ノ流行ヲ見タルカ

其ノ極期ハ七月二十日、十一月二日及三月一日ナリキ、成ル可ク種々ナル家屋ヲ有スル五箇所ノ地域ヲ選ミテ調査セシモノニシテ其ノ調査戸數一、〇六一、同上人員四、六一九ヲ算シ、總人員ノ約二%ヲ數ヘタリ

一、罹病者

性別	總人口	患者數	同上百分率
男性	一、八九四	五二三	二七・六%
女性	二、七二五	八六四	三一・七%

備考 本患者數一、三八七ナルモ、二回感染セルモノ一六四、三回感染セルモノ

六、アルヲ以テ患者數ハ一、三〇一ナリ

二、死亡率

流行時期	患者數	死亡數	同上百分率
一九一八年夏期	二九五	—	—%
一九一八年秋期	六七八	二六	三・八%
一九一九年春季	三七〇	六	一・六%
合計	一、三八七	三二	二・三%

因ニ女性死亡率 二・五% 男性死亡率 一・九%

三年齡別

年齡別	總人口	患者數	同上百分率
一	四四九	一一三	二五・一%
二	一〇八九	三三八	三三・〇%
三	八一〇	二九〇	三五・八%
四	六二五	二四三	三八・八%
五	五四六	一七一	三一・三%
六	五二六	一三五	二五・六%
合計	四、六一九	一、三八七	三〇・一%

第二節 北米合衆國ニ於ケル流行性感胃ノ流行

狀況及豫防方法ノ概要

第一項 流行狀況

一、一九一八—一九一九年ニ於ケル狀況

一九一八年八月二十八日 Bostonニ於テ本病患者ノ發生セシヲ始メトシ、九月ニ入ルヤ大西洋及メキシコ灣沿岸、海港地ニ於テ流行狀態ヲ示シ來リ、主ナル都市ニシテ流行ヲ呈セシモノ前記 Boston ヲ始トシ Cambridge, Mass., Fall River, Mass., Lowell, Mass., Worcester, Mass., Baltimore, Mass., Providence R. I., Philadelphia, Pa., Pittsburgh, Pa., New York, N. Y., Syracuse, N. Y., Newark, N. J., Richmond, Va., New Haven, Conn., Washington, D. C., Birmingham, Ala., Chicago, Ill. 等各方面ニ及ヒタルノミナラス蔓延ハ急激ニ西

至自一九一九年九月二十五日 期間ニ於ケル亞米利加合衆國主要都市ニ於ケル流行性感冒及肺炎ニ因スル死亡數

市名	人口	流 行 性 感 冒 及 肺 炎 死 亡 數												合計	千人率	
		九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八			
Albany, N. Y.	111,424															
Atlanta, Ga.	101,271															
Baltimore Md.	144,340															
Birmingham Ala.	144,340															
Boston, Mass.	244,340															
Buffalo, N. Y.	244,340															
Canton, Mass.	111,424															
Chicago, Ill.	1,111,424															
Cincinnati, Ohio.	111,424															
Cleveland, Ohio.	111,424															
Columbus, Ohio.	111,424															
Dayton, Ohio.	111,424															
Denver, Colo.	111,424															
Fall River, Mass.	111,424															
Grand Rapids, Mich.	111,424															
Indianapolis, Ind.	111,424															
Jersey City, N. J.	111,424															
Kansas City, Mo.	111,424															
Los Angeles, Cal.	111,424															
Louisville, Ky.	111,424															
Lowell, Mass.	111,424															
Memphis, Tenn.	111,424															
Milwaukee, Wis.	111,424															
Minneapolis, Minn.	111,424															
Nashville, Tenn.	111,424															
Newark, N. J.	111,424															
New Haven, Conn.	111,424															
New Orleans, La.	111,424															
New York, N. Y.	1,111,424															
Oakland, Cal.	111,424															
Omaha, Nebr.	111,424															
Philadelphia, Pa.	1,111,424															
Pittsburgh, Pa.	111,424															
Portland, Oreg.	111,424															
Providence, R. I.	111,424															
Richmond, Va.	111,424															
Rochester, N. Y.	111,424															
St. Louis, Mo.	111,424															
St. Paul, Minn.	111,424															
San Francisco, Cal.	111,424															
Seattle, Wash.	111,424															
Spokane, Wash.	111,424															
Worcester, N. Y.	111,424															
Yakima, Okla.	111,424															
Washington, D. C.	111,424															
Worcester, Mass.	111,424															
合計	11,111,424															

一、本表中ニハ發生ノ報告ヲ録シテ流行人數ノ種メヲ示シ
 二、粉々全部ノ都市ハ一回以上ノ流行ヲ録シ返シタルカ知ラズ、各流行ノ時期トモ思ハルメニ週間ニ於ケル發生數ハ太字ニテ記セリ
 三、本表ニ於ケル最後ノ週間ニ於テ發生數增加ノ傾向アルモノモ亦太字ニテ記セリ

本表ニ明ナルカ如ク、本表ノ最後ノ週間ニ於テ尙ホ患者増加ノ傾向ヲ有スルモノ存在スルモ是等モ間モナク病勢ノ減退ヲ始メ二、三月ノ交ニハ本流行ハ大體ニ於テ終熄セリト稱ス可キ状態ヲ示スニ至リタリ

尙ホ自一九一八年九月至一九一九年二月期間ニ於ケル流行性感胃ニ因スル死亡數ヲ推知シ得可キ爲メ左ニ一表ヲ掲ク可シ

本表ハ前表同様主要都市ニ付キ調査シタルモノニシテ流行期間ニ於ケル流行性感胃及ヒ肺炎ニ因スル死亡數、並ニ流行期間ニ於ケル總死亡數ト前年同期ニ於ケルモノトノ比較ヲ明ニセラルモノナリ

第二表 一九一八年九月一日期間ニ於ケル亞米利加合衆國主要都市ニ於ケル流行性感胃肺炎ニ因スル死亡及前年同期ニ於ケル總死亡ニ比較セル超過死亡數

都市名	人口(一九一八年七月二日推定)	死亡		對人口千ニ	前年同期ニ於ケル總死亡數ト比較シテ超過セル死亡數	對人口千ニ	一九一七年一月至二月ノ死亡數
		流行性	肺炎				
Alleny, N. Y.	一一二,五六五	五七〇	一七八	六・六	五三四	四・七	一一九
Baltimore, Md.	六六九,九八一	一九五六	三,〇〇六	七・四	四,一一八	六・一	八五三
Boston, Mass.	七八五,二四五	四,七一	一,四七二	七・九	五,一〇七	六・五	九四二
Buffalo, N. Y.	四七三,二二九	二,一七二	九〇三	六・五	二,七六六	五・八	四六五
Cambridge, Mass.	一一一,四三二	五〇一	一九七	六・三	六六一	五・九	一〇三
Chicago, Ill.	二,五九六,六八一	七八七八	五,二九八	五・一	九,九五六	三・八	二,五五七
Cincinnati, Ohio.	四一八,〇二二	一,八九七	三六六	五・四	一,六七〇	四・〇	四一八
Cleveland, Ohio.	八一〇,三〇六	三〇五四	一,三五二	五・四	三,二五四	四・〇	七八七
Columbus, Ohio.	二二五,二九六	七二六	二二二	四・二	七一〇	三・二	二二七
合計		七四八	四,九六二				

Dayton, Ohio.	一三〇、六五五	五二七	二二一	七四八	五・七	四六〇	三・五	一四二
Pall River, Mass.	二二八、三九二	七六六	一三六	九〇二	七・〇	七四九	五・八	一六七
Grand Rapids, Mich.	一三五、四五〇	九六	二四八	三四四	二・五	二〇六	一・五	六二
Los Angeles, Calif.	五六八、四九五	二六三六	五五七	三、一九三	五・六	二、九六八	五・二	三〇四
Louisville, Ky.	二四二、七〇七	一五〇	一〇五六	一、二〇六	五・〇	八六九	三・六	二九〇
Lowell, Mass.	一〇九、〇八一	一七四	五二一	六九三	六・四	五五四	五・一	一一七
Milwaukee, Wis.	四五三、四八一	三三九	一、二四七	一、五八六	三・五	一、三三三	二・九	四〇三
Minneapolis, Minn.	三八三、四四二	一〇九九	一九四	一、二九三	三・四	一〇二二	二・七	二六六
Nashville, Tenn.	一一九、二一五	六四〇	二五四	八九四	七・五	九二八	七・八	一四四
New Haven, Conn.	一五四、八六五	九一四	二二七	一、一四一	七・四	八六〇	五・六	二〇六
New Orleans, La.	三八二、二七三	二、一九九	一、一一四	三、三一一	八・七	二、七六七	七・二	四三一
New York, N. Y.	五、二一五、八七九	一五、四四九	一六、五一一	三、一九六〇	六・一	二四、三二九	四・七	六、五〇五
Oakland, Calif.	二一四、二〇六	九七五	二五九	一、二三四	五・八	一、二六八	五・九	一一九
Philadelphia, Pa.	一、七六一、三七一	八八〇七	六、七五九	一五、五六六	八・八	一、二七九〇	七・三	二、三九四
Pittsburgh, Pa.	五九三、三〇三	二、五四五	三、一五三	五、六九八	九・六	四、七四三	八・〇	一、三三三
Providence R. I.	二六三、六一三	一、〇九一	五三一	一、六二二	六・二	一、三八九	五・三	二八八
Rochester, N. Y.	二六四、八五六	一、〇〇二	二七二	一、二七四	四・八	七〇三	二・七	二二六
St. Louis, Mo.	七、七九、九五一	二、一八八	一、四二五	三、六一一	四・六	二、三三三	三・〇	九六一
St. Paul, Minn.	二、五七、六九九	八九四	一九七	一、〇九一	四・二	八五二	三・三	一五八
San Francisco, Calif.	四、七八、五三〇	三、一九二	五九三	三、七八五	七・九	三、五八六	七・五	三六〇
Toledo, Ohio.	二六七、二三四	五六七	三一八	八八五	三・四	五六一	二・一	一七〇
Washington, D. C.	四〇一、六八一	二、二九四	八二二	三、一一六	七・八	二、六三七	六・六	四二二
合計	一九五〇、三八三六	七二、〇〇九	四九五九八	一、二一、六〇七	六・二	九六、六七四	五・〇	二一、九四九

本表ニ見ルニ、流行性感冒及肺炎ニ因スル死亡數ノ最モ大ナルハ Pittsburgh, Pa. (人口千對死亡

率九・六) Philadelphia, Pa. (同上率八・八) New Orleans (同上率八・七) San Francisco, Calif. (同上率七・九)等ニシテ Grand Rapids, Mich. (同上率二・五) Toledo, Ohio (同上率三・四) Minneapolis, Minn. (同上率三・四)ヲ最小トシ其ノ他ノ都市ハ其ノ中間ニ位セリ、而シテ大都市ノ平均人口千對死亡率ハ六・二ヲ示セリ、總死亡數ノ差數ニ付キテ之ヲ見ルニ、其ノ人口對率ハ流感肺炎人口對死亡率ニ比シ少シク低位ニ在リト雖モ、殆ト同様ノ數字ヲ示シ、人口千對超過死亡率八・〇 (Pittsburgh, Pa.) 同率七・二 (Philadelphia, Pa.) 同率七・五 (San Francisco, Calif.) 同率七・二 (New Orleans, La.) 等ヲ最高率トシ Grand Rapids (一・五) Toledo, Ohio. (一・一) Minneapolis, Minn. (七・二) Rochester, N. Y. (二・七)ヲ最低位トシ全部市人口千對死亡超過率平均五・二ヲ示セリ

記述セシ所ノモノハ總テ大ナル都市ニ關セシモノナルカ本病ノ流行狀況殊ニ其ノ劇烈ノ程度ハ他ノ小ナル都市若クハ郡部ニ於テモ彼ト同様ナリシヤ否ヤ、北米聯合政府衛生局ニ於テハ後段記スカ如ク各方面ノ種々ナル地方ニ付キ本流行ニ關スル流行病學的調査ヲ施行シ、又Minnesota州ニ於テモ亦同様ノ調査ヲ行フ所アリシカ、之等ノ成績ニ依レハ本病ノ流行狀況殊ニ流行性感冒ニ因スル死亡數ハ郡部ニ依リ殆ト其ノ差異ヲ見ス、又英國ニ於テ調査セシ處ニ依ルモ亦殆ト同様ノ關係ヲ示セリ、之等ノ調査成績ヲ以テ判斷スレハ、郡部ニ於テモ前記都市ニ於ケルモノト殆ト同様ノ人口對死亡率ヲ示シタルモノナルコトヲ推シ得可キカ如シ、北米合衆國衛生當事者ノ一人ハ一九一八—一九一九年ニ於ケル流行性感冒ニ因スル死亡ハ約四十五萬内外ナル可シト推言シ、マター衛生官ハ一九一八年ニ於ケル流行性感冒ニ因スル死亡約四十萬ト推定セリ

二、一九二〇年ニ於ケル狀況

一九二〇年ノ始メヨリ流行ノ兆ヲ示セシ地方ヲ見ルニ至リタルモ、其ノ流行ノ程度ハ前年ノモノニ比シ遙ニ輕ク、全體ニ就テ言ヘハ前年ノモノニ比シ三分ノ一以下ノ流行トモ稱シ得可キカ如シ、主要都市ニ就キテ見ルニ劇シキ地方ハ前年ト殆ト同様ノ狀況ヲ示セシモ紐育市、市俄古市等ノ如キハ流威ニ因スル死亡數前年ノモノノ半ニ足ラス、其ノ他ノ都市ニ於テモ前年ニ比シ遙ニ緩慢ナルモノ多カリキ、今左ニ主要都市ニ於ケル流威及肺炎ニ因スル死亡數ヲ週別ニ掲ケ以テ全流行ノ概況ヲ示サントス

第一表 一九二〇年一月二月ニ於ケル主要都市ニ於ケル流行性感冒及肺炎ニ因スル死亡

市	時期(ニ終ニ週間)											
	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
Albany, N. Y.	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
Atlanta, Ga.	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
Baltimore, Md.	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
Birmingham, Ala.	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四
Boston, Mass.	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一
Huffalo, N. Y.	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
Cambridge, Mass.	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
Chicago, Ill.	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
Cincinnati, Ohio.	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八
Cleveland, Ohio.	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一
Columbia, Ohio.	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八
Dayton, Ohio.	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五
Denver, Colo.	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七

市	時期(ニ終ニ週間)											
	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
Detroit, Mich.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Fall River, Mass.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Grand Rapids, Mich.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Indianapolis, Ind.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Jersey City, N. J.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Kansas City, Mo.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Los Angeles, Calif.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Louisville, Ky.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Lowell, Mass.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Memphis, Tenn.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Millwaukee, Wis.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Minneapolis, Minn.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Nashville, Tenn.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Newark, N. J.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
New Haven, Conn.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
New Orleans, La.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
New York, N. Y.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Oakland, Calif.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Omaha, Neb.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Philadelphia, Pa.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Pittsburgh, Pa.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Portland, Oreg.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Providence, R. I.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Richmond, Va.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
Rochester, N. Y.	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

- 委員長　ダブリュー、エー、エバンズ(シカゴ)
- 委員　デー、ビー、アームストロング(マサチューセッツ州フラミンガム)
- 同　ウキリヤム、エチデビス(ワシントン)
- 同　イー、ダブリュー、コッフ(ニューヨーク)
- 同　ウキリヤム、シー、ウツドワード(ボストン)

一、本病ノ性質

現在流行シツツアル疾病ハ一般ニ「インフルエンザ」トシテ知ラレ居ルモ、果シテ本病ハ從來ノ所謂「インフルエンザ」ト同一疾病ナリヤ否ヤ、尙ホ從來「インフルエンザ」ト稱シツツアルモノハ總テ皆同一疾病ナリヤ否ヤニ就キテハ未タ之ヲ斷定スルコト能ハス

而シテ本病ノ病原體ハ患者ノ鼻及口ヨリ排出セラレ、口及鼻ヲ通シテ傳染スルモノノ如シ、眼結膜又ハ涙管ヲ通シテ傳染スルコトアル可キモ、極メテ稀有ノコトニ屬ス

二、豫防

病原體ハ患者ノ鼻及喉頭ヨリ排出セラレ、他人ノ鼻、喉頭ヨリ傳染スルモノトスレハ豫防方法ノ原則トスル所ハ理論上左ニ示スカ如クナル可ク、此意味ニ於テハ病原體ノ確定ヲ待ツノ要ナカル可シ

- 一、傳染ノ徑路ヲ遮斷スルコト
- 二、「ワクチン」ヲ使用ニ因リ人ヲ免疫シ又ハ少クトモ其ノ抵抗力ヲ高ムルコト
- 三、個人ノ健康状態ヲ増進シ以テ自然抵抗ヲ増サシムルコト

(一) 傳染徑路ノ遮斷

イ、飛沫傳染ヲ防クコト最モ肝要ナルコトニ屬ス

ロ、咯痰ヲ取締ルコト　咯痰ニ依ル危險ハ主トシテ手、共用飲食器具ヲ汚染スルノ點ニ至リ

ハ、飲食物ヲ監視スルコト　飲食物ニヨル危險ハ蓋シアマリ多カラサル可シ

本項ニ關シテハ後段詳細ニ説明スル所アル可シ

(二) 免疫ト「ワクチン」

イ、「インフルエンザ」ノ豫防及輕減

ロ、「インフルエンザ」菌或ハ連鎖狀球菌肺炎菌等ニ因リ發生スルモノト認メラルル併發症ノ豫

防及輕減

豫防ヲ目的トスル「ワクチン」カ果シテ有效ナルヤ否ヤノ範圍ニ於テハ委員相互ノ意見合致スルニ至ラス、本委員會ハ「ワクチン」ヲ使用シ確ニ好結果ヲ得可シト斷定シ得可キ實證ヲ有セス

(三) 自然抵抗ノ増進

休養、睡眠時間、運動、心身ノ勞働等ニ注意シ精神ノ過勞ヲ避ケサル可カラス、然レトモ如何ニ健康ナリト雖モ本病ニ感染セサルコトヲ保證スルコトヲ得ス

抑モ豫防方法ハ其ノ地方ノ社會状態並ニ其ノ流行ノ時期及程度ニ密接ナル關係ヲ有スルモノナリ、例エハ全ク村落ナル地方ニ適當ニ施行セラル可キ方法ハ大都市ニハ實行シ得ラレサルカ又ハ之ヲ實行スルコトヲ適當トスル能ハサルモノアル可シ又流行ノ初期又ハ末期ニ適當ニ施行セラル可キ方法ハ之ヲ其ノ中間ニ於ケル時期ニ施行セハ必スシモ最善ノ方法ト云フ能ハス、此ノ如キ状態ナルカ故ニ何レノ衛生官ニモ適當ナル一定ノ豫防方法ヲ編成スルコトハ困難

ナルヲ感セサルヲ得ス、故ニ本委員會ハ豫防ニ關スル原則ヲ定メ、其ノ取捨撰擇ハ各地方ノ公衆衛生保護ノ責任者ニ委セントス

當委員會ノ推舉セントスル豫防方法ノ概要左ノ如シ

- (一) 此ノ非常ニ應ス可キ有力ナル統一機關ヲ設置シ各方面ト協力スルコト
- (二) 本病ニ關シ充分ナル調査ヲ爲スニ足ル機關ヲ設クルコト
 - イ、強制的ニ届出ヲ爲サシムルコト
 - ロ、患者其ノ他ニ就キ通俗的竝ニ専門的ノ調査ヲ行フコト
- (三) 呼吸器性傳染病ニ關スル注意事項ヲ一般ニ周知セシムルコト
 - 咳嗽、噴嚏、咯痰及鼻咽喉排泄物ノ不注意ナル處置ニヨリテ來ル危險、指其ノ他ヲ鼻口ニ觸レサルコトノ必要、ハンカチーフヲ交換スルコトニ因ル危險、食事前ニ洗手スルコトノ必要、新鮮ナル空氣、一般衛生方法ノ必要、患者以外ノ健康者ニモ病原體ヲ有スルモノアルコトノ注意等
- (四) 公共團體ノ實行ス可キ事項
 - 一、共用「コップ」又ハ洗濯不適當ナル「コップ」ヲ使用ヲ禁止スルコト
 - 二、適當ナル換氣法ヲ規定スルコト
 - 三、集合ノ禁止

本項ハ最も重要ナルコトニ屬ス、量及度數ニ於テ集會ヲ制限スルコト及集會ノ許サル可キ條件ヲ規定スルハ重要ナル取締方法ニ屬ス、故ニ餘リ必要ナラサル集會ハ禁止スルコトヲ要シ、又必要止ムヲ得サル集會ハ一定ノ條件例ニハ成ル可ク一人ニ對スル面積ヲ大ナラシムル

コト、新鮮ナル空氣ヲ充分ニ入ラシムルコト、適當ナル豫防方法ヲ爲スコト、咳嗽、噴嚏等ヲナササルコト等ノ下ニ之ヲ開催セシム可キナリ、生計維持ノタメニスル活動竝ニ日常職務ノ遂行上、相當ニ密集接觸ノ止ムヲ得サル地方ニ在リテハ特別ナル集會ヲ閉鎖スルモ豫防ノ效果殆ト無カル可シ、反之各個人相互ノ接觸ヲ避ケ得ル状態ニ在ル社會ニ於テハ集會禁止ノ效ハ比較的大ナルモノアル可シ

イ、學校

本項ニ關シ考慮ヲ要スルハ左記事項ニシテ之ニ依リ閉鎖ノ要否ヲ判斷ス可キナリ

- 一、學校ニ於テハ理論上、兒童ノ接觸ハ増加ス可キモ、之ヲ閉鎖セハ兒童ノ接觸ハ主トシテ戶外ニ於テ生スルニ至ル可シ、閉鎖ニ依リ接觸ノ機會ノ増加スルヤ否ヤハ學校ノ所在地ニ依リ決セラル可キモノニシテ、都市ニ於ケルモノト、村落ニ於ケルモノトハ其ノ狀態根本的ニ異ル可シ

一、兒童カ學校ヘノ往復ニ險惡ナル天候ニ曝サレ又ハ非常ニ混雜セル電車等ニ長途乗ルコトヲ要スルヤ否

一、學校ニ於テハ充分ナル看護及醫學的視察ノ方法實行セララルヤ否

一、教師、醫師及看護婦ハ罹患セル兒童カ他ノモノト教室、校庭等ニ接觸スル以前ニ於テ之ヲ發見シ之ヲ隔離シ得ルヤ否

一、學校ヲ閉鎖セハ之ニ依リ人或ハ設備ヲ一般豫防ノ方面ニ利用シ得可キヤ否

一、學校ヲ閉鎖セサルトセハ教師ノ爲メ教育標準ヲ低メラルルカ如キコトナキヤ否

ロ、教會堂 之ヲ閉鎖セサル場合ニ於テハ祈禱會ハ必要ナル最小限度ノ人數ヲ以テナス可ク且ツ各個人ノ接觸ヲ出來得ル限リ減少セシムルノ方法ヲ以テ行フ可シ

ハ、劇場其ノ他ノ娛樂場 劇場活動寫真其ノ他ノ娛樂場ニ於テハ只不注意ナル咳嗽者ヲ除クコトノミニ依リ満足スル

ニ、賢キ方法ニ非ルカ如シ、尙ホ之ヲ閉鎖スルコトハ一般ヲ刺戟シ、之ヲ救養スルコトニ大ナル價值ヲ認ムルヲ得可シ

換氣法、及一般衛生狀態ノ良否ハ之ヲ閉鎖ス可キヤ否ヤヲ判斷スルニ付之ヲ參考トナスヲ得可シ

ホ、酒場等 閉鎖ス可キヤ否ヤハ其ノ集合ノ狀態及飲用器具ニ依リ疾病ノ蔓延スルヤ否ヤニ依リテ決ス可キモノナリ

ヘ、舞踏場等 舞踏場、球、コロガシ、玉突場等ノ閉鎖ハ之等ノ爲メ人ノ甚シキ接觸、群集ヲ來スヤ否ヤニ依リテ決ス可キナリ

ト、市街電車等 換氣法清潔法ニ留意ス可シ、甚シキ群集ヲ來ササル様ニ注意ス可シ、群集ヲ避クル爲メ會社工場等ノ就業及終業時間ヲ調整スルコトハ試ムルニ足ル可シ、小都市ニ於テ業務ノ場所ニ步行シ得ル場合ニ電車等ハ一時停止スルヲ一層可トス

チ、葬式 公ノ葬式、之ニ關スル儀式ハ之ヲ禁止ス可キナリ

四、「マスク」ノ使用 病院内若クハ其ノ他ニ於テ病毒ニ接觸スル者ニハ適當ナル「マスク」ヲ使用スルコトヲ強制ス可シ、尙ホ齒科醫理髮師等ニモ亦之ヲ強制ス可シ、然レトモ全住民ニ一般的

ニ之ヲ強制使用セシムルコトニ付キテハ委員會ハ其ノ效果ニ關スル確證ヲ有セサレハ之ヲ推舉スルコトヲ躊躇ス然リト雖モ各個人カ自己防衛ノ爲メニ「マスク」ヲ使用セントスル場合ニハ「マスク」ノ製法、使用法等ヲ教示シ且ツ之ヲ獎勵ス可シ

五、隔離 患者ハ隔離スルコトヲ要ス、不當ニ之ヲ怠ル者ハ嚴重ニ制裁ス可シ

六、張紙揭示 患者ニシテ必要ナル注意ヲ怠リ、公衆ノ利害ヲ顧ミサル場合ニハ患家ニ「張紙」ヲナス可シ

七、病院收容 或ル小都邑ニ於テハ患者ノ全部ヲ直ニ病院ニ收容シ須臾ニシテ流行ヲ終熄セシムルヲ得タリ、然レトモ總ノ患者ヲ發見シ、之カ病毒ヲ他ニ傳染セシメサル前ニ病院ニ收容スルニ非サレハ疾病ヲ撲滅スルヲ得サルモノナルコトニ留意セサル可カラズ

一般ニ之ヲ言ヘハ醫學看護其ノ他ノ設備充分ニシテ且ツ他ニ傳染ノ危險ナキ場合ニ於テハ自宅治療ヲ行ハシムルヲ可トス、病ノ輕重ヲ問ハス病院收容ハ只自宅治療ノ不充分ナル場合ニ於テノミ行フ可キモノトス、病院治療ノ缺點ト稱ス可キハ一患者輕症ニシテ第二次傳染ニ罹マサルニ於テハ病院ニ於テ其ノ傳染ヲ受クルノ危險アリ、二、重症ナル患者ナルニ於テハ家ヨリ病院ニ輸送スルコトニ依ル危險アリ

八、咳嗽、噴嚏 之ヲ相當取締ルコトハ救養上竝ニ實際上必要ノコトナリ

九、終末消毒 終末消毒ハ清潔ニスルコト、日光ニ曝スコト及換氣スルコトニテ充分ナリ

一〇、酒類 酒類ヲ用ユルモ豫防ノ效ナシ

一一、吸入液及含嗽劑 是等ヲ使用セシムルモ病毒ヲ豫防ス可キ效力ヲ見ス即チ

イ、之ニ依リ粘液ヲ容スルコトナク病原體ヲ滅殺スルヲ得ス
ロ、之ニ依リ病原體ヲ除去スルヲ得ス

ハ、之ヲ使用セハ畢竟、保護的性質ヲ有スル粘液ヲ除去シ却テ病毒ノ侵入ヲ容易ナラシム
ニ、家庭内ニ於テ之ヲ使用セハ同一器具ヲ共用スルノ弊アルヲ免レヌ

ホ、本方法ノ無効ナルコトハ「デフテリア」菌、腦脊髄膜炎菌ヲ以テ既ニ説明セラレタル所ナリ

三、雜

(一) 大學、養育院、其ノ他類似ノ建設物ハ流行ノ初期ニ於テ出來得可クハ一時的ニテモ外界ニ對シ
嚴重ナル檢疫方法ヲ施行スルハ效果アルコトナル可シ、結局ハ患者ノ發生ヲ見ル場合ニ於テ
モ、之カ爲メ患者ノ發生ヲ遲延セシメ、其ノ間醫療看護ノ設備ヲ完成スルノ餘裕ヲ生セシムル
ヲ得ルヲ以テナリ

(二) 推舉セル豫防方法ハ其ノ目的トスル所ヲ完成スルコト能ハサル場合ニ於テモ少クトモ流行
ヲ緩除ナラシムルヲ得可キヲ以テ寔ニ望マシキコトナリ

(三) 完全ナル統計及記録ノ調製ハ最モ緊要ノ事ニ屬ス

(四) 委員ハ患者數、死亡數、病症日數、經濟治療等ニ關シ蒐集セラレタル材料ノ統計的研究ノ必要ヲ

附記 本報告ニハ此ノ他醫療的家庭的救済ノ必要ヲ説キ尙ホ詳細ナル方法ニ就キ記載スル所アル

モ之ヲ略ス

二、豫防措置ニ關スル一般概況

實行セラレタル豫防措置ハ甚タ多種ナリシノミナラス、各州及各公共團體ニ從ヒ其ノ寬嚴ノ

度ヲ甚シク異ニセシト雖モ其ノ主ナルモノヲ擧クレハ左ノ如シ

一、患者ノ届出

肺炎ニ付キテハ今回ノ流行以前ニ於テ既ニ届出ヲ要スル疾病トシテ取扱ヒタル州少カラサ
リシカ、本流行ノ侵襲ト共ニ多數ノ州ニ於テハ流行性感胃ヲモ届出ヲ要スル疾病ニ加ヘタリ

此ノ如ク届出ハ規定セラレシト雖モ報告セラレタル患者ノ數ハ實際存在セシ患者ノ數ニ比
シ遙ニ少數ナリシモノノ如ク、且ツ其ノ程度ハ地方ニ從ヒ著シキ差異アリシモノノ如シ、ワシ
トン聯合政府ハ種々ナル地方ニ就キ流行病學的特別調査ヲ施行シ前記ノ事實アリシコトヲ認
メ、ロシア、アンゼルス市ノ如キハ届出數ハ實際數ノ半數ニモ滿タサル旨公表シ、シヤートル市ニ於
テモ一九一九—二〇年流行ノ際ニハ流行劇シカラサリシ爲メ届出數ハ實際數ニ比シ殊ニ著シ
ク少數ナリシト稱シツツアリタリ、而シテ衛生當事者ノ一人ハ此事實ニ關スル理由ヲ説明シテ
曰ク

抑モ本病ニハ病症ノ輕キモノ甚タ多ク之カ診斷ハ容易ノ業ニアラス、故ニ流行愈々猖獗ニ
向ハントシツツアルコトヲ一般ニ警告シツツアル場合ニハ醫師ハ本病ト診斷シ易キ傾向ヲ
來シ、其ノ届出數ハ俄ニ激増スルヲ常トスルモ反之流行終熄ニ近キツツアルコトヲ一般ニ告
知シツツアル場合ニハ醫師ハ本病ニアラスト診斷スルノ傾向ヲ増シ、從テ届出數ハ著シク減
少スルヲ常トス、此事實ハ届出數カ實際數ニ合致セサル所以ノ一ナル可シト

二、接觸ノ機會制限

イ、患者ニ關スル隔離若クハ檢疫

多クノ地方ニ於テハ本患者ノ隔離若クハ検査ヲ施行セシト雖モ其ノ方法及程度ニ就キテハ地方ニ依リ多少ノ差異ヲ見タリ其ノ概要ヲ舉クレハ先ツ左ノ三種トナスヲ得可キカ如シ

(一) 第一法 最モ嚴重ナルハ、ロスアンゼルス市ニ於テ施行セラレタルカ如キモノニシテ患家ニ於テハ患者ヲ適當ナル病室ニ隔離シ患家々人ニハ一定ノ豫防方法ヲ命シ、検査ノ期間ハ全然患家ノ交通ヲ遮斷シ只例外トシテ市衛生局長ノ許可ヲ得且一定ノ規定ヲ遵守スルノ條件ノ下ニ於テノミ患家々族ノ中稼人一人ノミニ患家出入ヲ許可セリ
左ニロスアンゼルス市ニ於ケル流行性感胃及肺炎ノ検査ニ關スル患家家族ニ對スル指示ヲ掲ク可シ

ロスアンゼルス市ニ於ケル流行性感胃、肺炎検査ニ關スル家族ニ對スル指示

一、白色張札

肺炎患者ノ存在スル住所ニハ黒字ニテ病名ヲ記載セル白色張札ヲ見易キ場所ニ直ニ爲スコトヲ要ス

一、青色張札

流行性感胃患者ノ存在スル住所ニハ黒字ニテ病名ヲ記載セル青色札ヲ見易キ場所ニ直ニ爲スコトヲ要ス、衛生局長ノ許可又ハ指示ニ依ルノ外是等ノ張札ヲ除去シ若クハ破損シ又ハ之ヲ見難キ状態トナシ或ハ是等ヲ爲サシムルコトヲ禁ス

一、移動

流行性感胃又ハ肺炎ノ患者ハ衛生局長ノ許可ナクシテ他ニ之ヲ移動シ又ハ移動セシ

ムルコトヲ禁ス

一、住所ヨリ出ツルコト

張札ヲ爲シタル家ニ在ル若クハ検査ノ處置ヲ受ケツツアル流行性感胃又ハ肺炎ノ患者ハ衛生官憲カ検査ヲ解除シ又ハ張札ヲ除去スルニ至ル迄ハ其ノ住所ヲ放ルルコトヲ得ス

一、検査ヲ受ケツツアル家屋ニ入ルコト

衛生局長ノ許可ナクシテ検査家屋ニ入り(但シ醫師ヲ除ク)若クハ之ニ兒童ヲ入ラシム可カラス

一、家族

検査ノ處置ヲ受ケツツアル家ノ家族ハ如何ナル場合ニ於テモ衛生局長ノ許可ナクシテ、其ノ家ヨリ外出シ若クハ兒童ヲ外出セシム可カラス

一、稼人

一家族ニ就キ稼人一人ノミハ衛生局長之ヲ許可シ且局長ノ指示セル規則ヲ遵守スル場合ニ限り、其ノ家ヨリ外出スルコトヲ得、但シ該規則ヲ遵守セサル時ハ直ニ之ヲ取消スコトヲ得ルモノトス

一、検査ノ期間

検査ハ患者ノ診察ニ従事セル醫師検査ヲ解除スルモ可ナルコトヲ報告スル迄繼續スルモノトス、該解除ハ検査家屋ニ於ケル最後ノ患者カ快癒セシ後、七日間以内ナル可カ